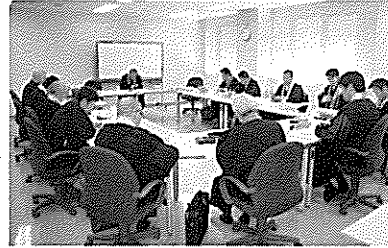


## 点描

## 北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.10

## 教区定例法座

## 一九六七年「教区定例白書」を表明



1967年から開始され、現在は「北海真宗」1面をテーマにして行われている「定例講師研修会」

1967  
昭和42年

真宗同朋会運動第一次五カ年計画によって、教区指定奉仕団・特別伝道・推進員認定研修会が実施された。その五年間の総括点検をとおして提唱された第二次五カ年計画は、「同朋会運動の主体を地方に移す」ことを主眼とした。

訓覇信雄宗務総長は、第二次計画に向けて、「同朋会運動については、信仰運動というのだけれども、今までの特伝というものは…一種のむかえ水みたいなもので、どういう地方にどういう住職、門徒、つまり、育成員、推進員がおられるか、それすらわからなかったんだから、それを特伝を実施していく上で見出す、掘出すということが主たる任務であった…その上でむかえ水をうけて自らやるという、地下に根がはえるというか盛り上がり上がってくるものを基盤にして初めて、動きだすところに信仰運動となるので、今まではその前段階だと思いますよ」と述べている。北海道教区は、一九六七年(昭

和42)、教区会で第二次計画に呼応する具体的な施策として教区定例法座の見直しを掲げた。現在の「定例講師研修会」もこの年から開始されている。

そして、教区教学委員会の組織教化部は、同年、定例布教の現状と問題点と題した「教区定例白書」を発表した。

白書は、定例法座の参詣者が低下の一端を辿り、末期的症状を呈しているとの断言する。また、教務所に寄せられる批判や注文を二つに整理分析して、教区内に具体的な対策を呼びかけた。

## 布教使の問題

「布教専従者の姿勢にかけていることは否定できない。昨年の統計を見ると約三分の二が道外からの輸入、残りが教区人である。布教とは名のみ、物売り、避暑、物見遊山のために来道したかと思われるもの、教学不勉強で門徒に対して申し訳ないものがあるのが事実である。」

## 宿寺の問題

「定例布教に対する意欲が欠如しているというべきである。参詣

人の減少の因は布教使のみにあるのではない。むしろ宿寺、住職に大きな責任があるといつてよい。参詣者を奨励もせず、寺族の聴聞も少ない。なり行きまかせの態度を感じる。それは、つまるところ定例布教そのものについての軽視、強いては、教導者(坊守を含めて)自身が自信を失って教団を盛り立てる意欲にかけているといつてはいいすぎであろうか。法礼については、特にそのことが如実に示されている。」

この問題の対策として、講師の派遣については、あらかじめ規定を設けて、この規定にあわぬ者の巡回には応じない。問法の経験を重視し研修会修了者を原則とする。毎月のテーマをきめて、あらかじめそれについて講題を宿寺に通知しておくこと。住職寺族は必ず参詣の間にてで聴聞すること。チラシの配布、黒板、机の使用、座談会を行うなどの努力をすること。法礼を改善することが挙げられた。

自己批判と歩みだす方向性を示す定例白書作成は、訓覇総長が述べた「動きだす」という信仰運動の核心を突く行動であった。